Japanese Association for Religious Studies

宗教間対話の思想
――理性は文化の多様性を超えうるか――

代表者・コメンテータ・司会　八巻和彦

アンセルムス
――諸文化を越境する理性――

矢内義顕

カンタベリーのアンセルムスの伝記作者エアドメルスは、一〇七九年にアンセルムスがイングランドを訪問した際、アングロ・サクソン時代の修道院・教会の伝統と征服者であるノルマン人のもたらした新たな伝統との相克から生じた幾つかの問題を、理性的な論証・対話によって解決したことを報告する（一・二九―三二）。彼は、「神の礼拝」（cultus）の文化的な多様性と対立から生じる問題を、理性によって解決したのである。それは彼自身の理性観の実践とも言うべき出来事だった。

アンセルムスの最初の著作『モノロギオン』（一〇七六年）は、三位一体論を含む神の本質についての黙想であると同時に、人間の存在と理性認識を根拠づける思索でもある。

神よって創造され、この世界に存在する諸事物は、神との類似性に従って、単に存在するもの、生存するもの、感覚をもつもの、理性的本性をもつものという存在の段階を構成する。さらに、理性的本性である人間の精神のうちには、記憶としての父なる神、理解としての子なる神、両者から発出する愛としての聖霊なる神、つまり三位一体の神の似像（imago Dei）が見出される。この神の似像としての理性は、正と不正、真と偽、善・悪、そして善の諸段階を区別・判断し、人間のうちにあって「君主また審判者」である。

この理性は固有の言語をもつ。『モノロギオン』第一〇章で万物が創られる際の創造者の言葉を検討する中で、彼は、人間が日常的に用いる三つの表現（locutiones）を挙げる。第一は、感覚的な記号、例えば「人間」という可感的な名辞を実際に語ることによって事物を表現する場合、第二は、この感覚的な記号を精神のうちにおいて非感覚的に―この場合、音声が消去されるから―考える場合、そして第三は、こうした感覚的な記号を用いることなく、肉体的な想像力あるいは理性の理解力によって事物を表現する場合である。この第三の表現とは、例えば、人間の感覚的な容姿を想像すること、あるいは「人間とは死すべき理性的な動物である」というように人間の普遍的な本質を考えることである。この普遍的な本質は、本来、創造者の理性のうちに「第一の本質そのもの、また第一の存在の真理」として存在し、創造によって諸事物に付与されたものである。それゆえ、理性に固有の言葉とは、創造者の理性の言葉の類似として、諸事物の普遍的な本質を可能な限り表わす第三の表現であり、あらゆる言語の基礎として、「すべての民族に共通している」とアンセルムスは述べる。あらゆる言語的な相違、それゆえ言語を生み出し、また言語によって規定される民族的、文化的な相違を超えて、普遍的な本質についての思索を生み出すもの、それが理性である。エアドメルスが報告する、イング

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ランドにおけるアンセルムスの論証・対話は、こうした神の似像という理性観に基づいていたのである。

イングランドから帰国した後、アンセルムスは、『真理について』をはじめとして数々の著作を著す。『言の受肉に関する書簡』（一〇九四年）では、ロスケリヌスの異端に対して理性的な論証をもって応える。また神の受肉と救済に関する信仰の理解を求め、同時にこの信仰に対して想定される異教徒の反論に応じるために対話形式で執筆された『神はなぜ人間となったか』（一〇九八年）においても「理性のみによる」方法を採用する。さらに、聖霊の発出に関して、ギリシア教会に対しラテン教会の神学（Filioque）を弁護する『聖霊の発出について』（一一〇二年）においても理性的な論証を望む。アンセルムスは、宗教的な対話の試みにおいて、一貫して理性的な対話を求めたと言ってよい。

もちろん、人間の理性は、あくまでも神の似像であるがゆえに、類似性と同時に差異性を伴っており、そこに理性の必然的な制約があることも、彼は決して忘れなかった。

宗教間対話の思想としての トマス・アクィナスの信仰理解

芝　元　航　平

トマス・アクィナス（一二二四／二五―七四年）は、「第一真理」という対象を「承認とともに思いめぐらす」という信仰の行為を可能にする習慣（対神徳）として「信仰」を理解している。この信仰概念には「承認する」という意志の働きと「思いめぐらす」という知性の働きが共に含まれている。信仰における「承認する」という意志の働きは、人間の自然本性を超えた仕方で神によって促されるものであるけれども、その前提となっているのは「〔人間の〕理性的本性は、善と存在者の普遍的な意味内容を認識する限りにおいて、存在の普遍的根源〔神〕への直接的な秩序づけを持っている」（『神学大全』第二―二部第二問第三項）という、人間の自然本性の在り方である。

人間の理性的本性を基盤とするこのような信仰概念に基づいてトマスは「暗黙の信仰」による異教徒の救いについて語っている。確かにトマスは「啓示された恩寵の時の後では、学識多き人々も少なき人々も、キリストの神秘について明示的な信仰を持つように拘束される」（『神学大全』第二―二部第二問第七項）と述べ、すべての人間がキリストを信じるべきであると主張している。しかし一方でトマスは、同項第三異論で、擬ディオニュシオスの「異教徒の多くの者たちが天使たちの奉仕を通して救いを得た」という言葉に基づいて、キリストの神秘を明示的に信じることは万人にとって救いのために必要ではなかったと思われるという異論を提出する。この異論に対するトマスの解答は、「異教徒の多くの者たちにキリストについての啓示がなされた」というものであるが、それとともに啓示を受けなかった人々の救いの可能性についても言及している。「しかし、もし啓示が与えられなかった者たちが救われたとしても、彼らは仲保者〔キリスト〕への信仰なしに救われたのではない。な

NII-Electronic Library Service